



クライバーの伝記の難点

1957年、英国人ジョン・ラッセルが、エーリヒ・クライバーに関して最初の伝記を公表した。本来この本は「ドイツ語圏の筆」で書かれるべきであった、と後に残念に思ったのは、著名な音楽ジャーナリストK. H. ルッペルばかりではなかった。このことと、それが唯一の本であり続けたという事実とは、亡命生活を送った彼の悲劇を反映している。彼は10年以上もの間、ドイツの音楽生活から離れて活動しており、政治的理由から、結局は故郷オーストリアでもドイツでも、地歩を占めることに成功しなかったのである。彼が移住者として、遺憾にもすでに怪しい者と見られたとき、東ベルリンの国立歌劇場での彼の係わりは結局失敗に終わったが、政治的に引き裂かれた戦後ドイツにあって、一途な保守主義者の彼は、そのことでまったく政治的なオフサイドに立ち入ったのである。その分だけ彼は当時ウィーンで、策略の犠牲に陥りやすくなった。そうした策略にあって、ウィーン国立歌劇場を指揮するという彼の希望は飛び散ったのである。

今や父と息子の比較が好まれるとはいえ、ここにおいて一見、カルロス・クライバーと比較しうるものとして、頭について離れないものはないように思われる。70年代以来、彼について本を書こうと賭けたドイツ語圏の人は、男女とも少なくなかったが、皆断念した。宣伝や名声に関心がなかったこの名指揮者が、誰が相手であろうと、そのような計画に決して与ろうとしなかったからである。しかしクライバー自身を抜きにして、インタビューを抜きにして、あるいは本人の死後、家族を抜きにしては、伝記は不可能なはずではないかという考えを、私は最初から疑っていた。

私が自分の目標を頑なに追求しなかったならば、近い将来にカルロス・クライバーに関する本がいつ出版されることになったか、そしてそもそも出版されたかどうかを、誰が知ろうか。というのも、外国であえてそれを行いたいと思った人は、ほとんど測り知れない調査の茂みに直面しているのが、すぐに見えたのである。

それでやはり、視線が再び父の方に戻るのである。但し、彼の伝記を自発的に書こうとすれば、同様に相当な調査を要したであろう。というのも彼もまた、自らの私生活を公衆から閉ざし、人が自分に近づくのをまず許さなかったからである。もし、彼の成功や死後の名声に目的意識をもって携わった、意志の強い妻がいなかったならば、あるいは彼の伝記が書かれることは決してなかったかもしれない。クライバーの死後、彼女がまさにドイツ語に翻訳しようと努めたことは、それが彼女にとっていかに重要であったかを証明している。ジョン・ラッセルは厳選された資料を入手した。すなわち、ルース・クライバーが自ら「検閲」し、個人的に委託した著者のためにタイプ打ちした手紙である。したがって、そのすべての質にもかかわらず、「色のついた」伝記なのである。よりもよってカルロス・クライバーが、ある著者にインタビューや手紙を率直に提供し、相当にその著者の自由に任せたなどと、誰が信じるだろうか。

確かに私にとって重要だったのは、クライバーの生涯の全てを公衆の明るみに引っ張り出すことではなく、やはり非常に個人的で信頼性をもって評価された多くの典拠に基づいて、人間として、また芸術家としてのカルロス・クライバーについて、

意味のある客観的なイメージを伝達することであった。その他の前提の下でしか伝記が可能でないと見たければ、往々にしてより多くの同時代の証人に尋ねることさえできず、あるいはずっと少ない情報しか物にしなかった数え切れない伝記作者たちは、筆を取ることを決して許されなかったであろう。